

おかあさんの 日記帳

清水 達也・作
福田 岩緒・絵

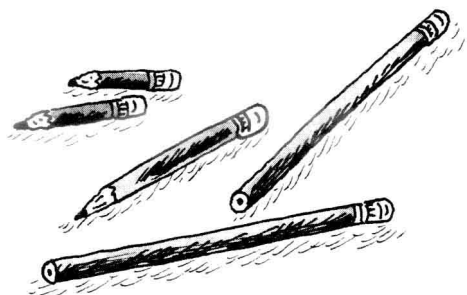


おかあさんの日記帳

清水達也・作

福田岩緒・絵





愛と心のシリーズ⑥
におかあさんの日記帳

作・清水達也

1988年12月 第1刷

絵・福田岩緒

発行者・田中治夫

編集・村地春子

発行所・株式会社ポプラ社

〒160 東京都新宿区須賀町5

振替／東京4-149271

電話／(営業)03-978-0051 (編集)03-357-2216

印刷・瞬報社写真印刷株式会社

製本・石毛製本株式会社

NDC916/135p/22cm

ISBN4-591-02885-2

© SIMIZU TATUYA / FUKUDA IWAO

●落丁本・乱丁本はお取りかえします●

はじめに

母は、よく日記をつけていた。母の本^{ほん}だなには、ぶあつい表紙^{ひょうし}の日記帳^{にっきちょう}がずらっとならんでいた。小学生^{しょうがくせい}のころのある日^ひ、ぼくは、母のるすに、こっそりそのなかの一さつをのぞきみた。

昭和八年^{しやうわ}六月^{ねん}十五日^{がつ}。ぼくの生^うまれた日^{にち}。

そこには、

「達也^{たつや}、日^ひの出^でとともに生^うまれる。」

と、一行^{ぎぎょう}だけ書^かかれてあつた。

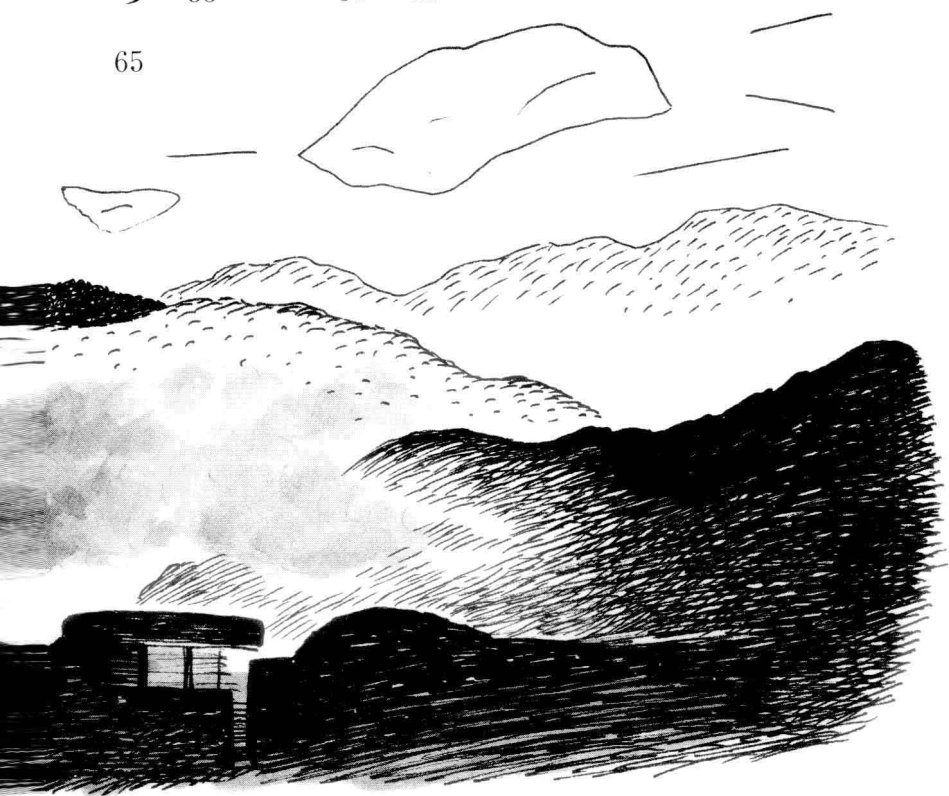
その一行^{いっしやう}にぼくは、母のぼくの一生^{いっしやう}にかける

あついおもいを感じ^{かん}とっていた。



もくじ

- 1 汽車きしゃにのつて 6
- 2 わすれていた宿題しゅくだい 19
- 3 おこげのおにぎり 34
- 4 父ちちの夢ゆめ 43
- 5 東京とうきょうからの転校生てんこうせい 53
- 6 オレンジ色いろのえんぴつ 65



7 明子^{あきこ} 71

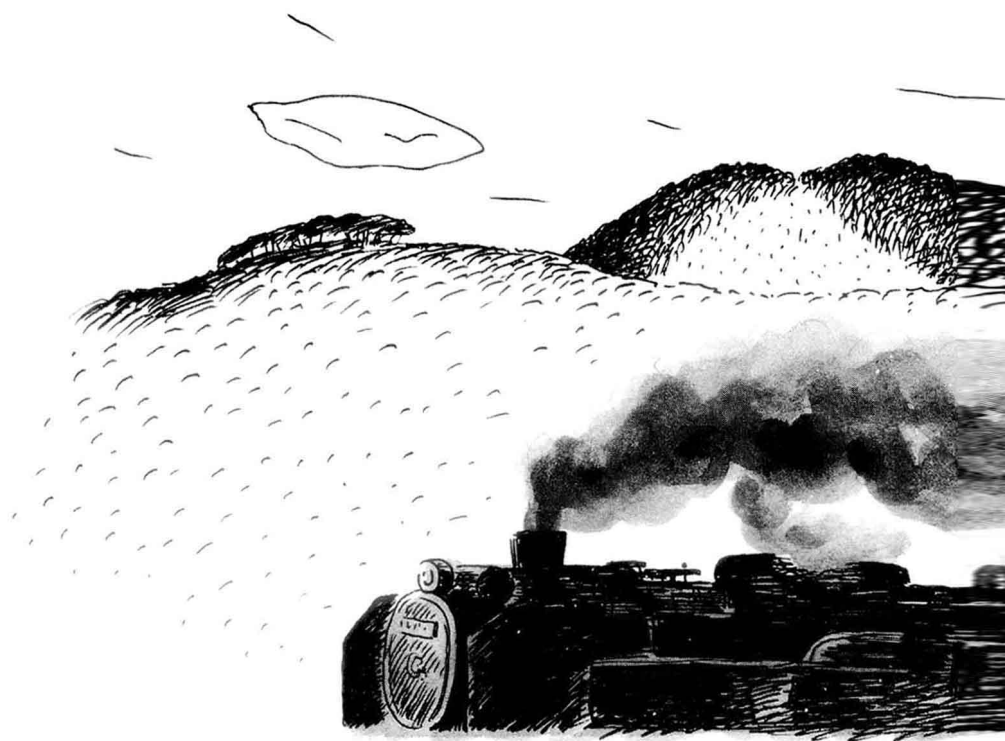
8 不良^{ふりよう}といわれて 81

9 茶^{ちや}わんまつ黒^{くろ}作^{さく}戦^{せん} 90

10 七^{なな}つのふしぎ話^{ばなし} 104

11 父^{ちち}の死^し 116

おわりに 130





●作家

清水達也（しみず たつや）

1933年、静岡県榛原郡金谷町に生まれる。小学校教員、静岡県立中央図書館員、静岡県立教育研修所指導主事を経て、現在フリー。子どもの本の研究、読書運動、児童文学創作活動にたずさわる。静岡県子どもの本研究会会長。絵本作品に、「火くいばあ」「お茶のふるさと」「おばあちゃんのゆのみ」(以上ポプラ社)等、創作に、「雨の教室大じけん」(ひさかたチャイルド)「どろ田の村の送り舟」(学校図書)他多数。

●画家

福田岩緒（ふくだ いわお）

1950年、岡山县倉敷市に生まれる。絵本、さし絵の世界で活躍中。絵本作品に「おばあさんのふしぎなコタツ」「おならばんざい」(以上ポプラ社)等、さし絵作品に、「チョコレートにはりぼんをかけて」「ひとりぼっちのコロ」「ぼくとあいつの放課後」(以上ポプラ社)「ワンツーパンチたまがったあ!」(文研出版)「空とぶ木のひみつ」(新日本出版社)他多数。

おかあさんの日記帳
にっ き ちょう



1 汽車きしゃにのって



ぼくの家いえは、田んぼたんぼのなかにあった。

春風はるかぜがふきはじめると、家のまわりは、いちめん
に、みどり色いろにそまった。

そのみどりのじゅうたんをたちきるように、まっ
黒い機関車きかんしゃが日に数回すうかい、短い客車きやくしゃをひき、白いけ
むりをはきながら、いせいのいい汽笛きてきを鳴ならして
走はしった。

家の門もんの前まえにたつと、田んぼのむこうに小さな駅えき
のホームがみえる。

家にいてもみられる汽車きしゃを、ぼくはよく、遠くとくに
汽笛きふくをきくとかけだして、わざわざ駅前広場えきまひろばにいつ
てながめた。

小学生しょうがくせいになったばかりの日曜日にちようびのことだった。

その日は、朝あさから駅前広場でひとりぼんやりと、やってくる汽車を待まっていた。
「おい、家山いえやまにつれてつてやらあ。」

ふいにうしろから声こえをかけられて、ぼくは、ぎくつとしてふりむいた。
四年生ねんせいの安夫やすおだった。近所きんじよではきらわれものの、いたずらつ子だ。

（いやなやつがきたな。）

ぼくはそうおもったが、安夫は、ぼくの気持ちきもちになどかまわず、にこにこしながらはなしかけてきた。

「家山へいったことあるか？」

家山は、汽車で、大井川おおいがわぞいに四、五十分ぶんさかのぼったところにある茶ちやどころの町まちだ。ぼくは、まだい子ども汽車にのったことがなかったから、家山がどんなところかも知しらなかった。

きよんとしているぼくに、安夫は、いった。

「家山にはな、大きい池いけがあつて、ボートもあるぞ。のりにいかないか。」

ボートときいて、ぼくの心は動いた。絵本では知っているが、ほんものはみたことがない。

ぼくは、いつてみたくてたまらなくなった。

「つれてつて！」

「よし、こんどくる汽車にのるぞ。」

安夫は、ぼくの手をひっぱっていき、改札口からはなれたホームのはずれの線路わきにじんどった。

ここからだ、改札口をとおらずに汽車にのれるというのだ。

ものなれた安夫のようすに、ぼくはすっかり感心しながら、どうじに、ただのりがみつかったらどうしようかと、こわくもなった。でも、安夫がいつしよならだいいじようぶだと、自分にいいきかせた。

ふたりに遊んでいるふりをして、汽車を待った。

やがて、安夫がレールに耳をあて、

「きたぞつ。」

と、小聲ここえでいった。

まもなく、汽笛きてきがきこえ、白いけむりをもくもくはきながら、まっ黒くろい機関車きかんしゃが近づいてきた。

汽車がホームにはいると、

「いくぞつ。車掌しやしやうにみつかるな。」

安夫はぼくに声こえをかけ、ぱつと線路せんろにとびだした。そして、そのままホームにかけあがった。ぼくもまねして、あとにつづいた。

ぼくらは、すばやく客車きやくしやのなかにもぐりこんだ。

どうやらぶじに座席ざせきにすわったが、とたんに、ぼくは不安ふあんになった。だれかにみつきりはしなかったか、車掌しやしやがきはしないかと、きよろきよるあたりをみまわした。

ぼくが、びくびくしているのをみて、安夫は耳もとで、そつとささやいた。

「おら、小さいからきつぷなんかいらないだぞ。」

ほんとかなとおもいながらも、ぼくは、少しほっとした。

右手の窓に、川の流れと対岸のけしきが流れていく。

汽車は、大井川にそって北上していた。

窓をあけ、身をのりだすようにして外をながめていたぼくに、安夫がせんはいぶっていった。

「前をむくと、けむりが目にはいるぞ。うしろをむいていろよ。」

川のほとりにある小さな駅を二つすぎ、一つ二つとトンネルをぬけて、まもなく家山についた。

ぼくらは、のったときと同じように、線路へとびおり、そのままさくをくぐりぬけて、町の通りへでた。

はじめてやってきた山あいの町だった。



駅前えきまえから線路せんろぞいに、家並やなみがつづいている。その町並まちなみのうらてに、大きな池いけが広がひろっていた。

池のまんなかあたり、岸きしべが半島はんとうのようにつきでたところに、一本ぽんのヤナギの本があつて、そばの小屋こやに、貸ボートかしのかんばんがみえる。

安夫やすおは、すたすたと貸ボート店てんへいき、店番みせばんをしているおばあさんに、なにごとか交渉こうしやうした。

やがてぼくを手まねきすると、岸につなぎとめてあつたボートにふたりでりこんだ。

店のおばあさんが、岸べで、

「だいじょうぶかね？」

といって、両手りやうてで腰こしをとんとたたきながら、みまもっている。

「まあ、みてな。」

安夫は、おとなびた口をきいて、オールで岸をぐいとおした。

ボートは、ゆらゆらゆれながら、岸をはなれた。安夫は、なれた手つきで、オー
ルを動か^{うご}かし、へさきを池のまんなかにむけた。

はじめのうちは、船^{ふね}べりにしがみつくようにしていた^はくも、ボートのゆれに
なれるにしたがつて、だんだんだいたんになった。

からだをのりだして、水面^{すいめん}に手をいれて水をきつたり、うかんでいる水草^{みずくさ}をす
くつたりした。

「あんまりかたほうばかりによるなよ。ボートがひっくりかえるぞ。」

安夫^{あづ}が気^きにしていう。ぼくは、あわててからだをおこす。その目の先^{さき}に、カイ
ツブリがびよこつと頭^{あたま}をだした。

「あ、あそこ、安ちゃん、あれ追^おいかけて。」

「ようし、しっかりつかまってるよ。」

安夫^{あづ}が、オールをこぐ手^てに力^{ちから}をこめ、スピードをあげる。

カイツブリを追いかけまわしたり、うき島^{しま}をめぐつたりしているうちに、いつ

かときがすぎた。

「腹はらへったなあ。」

安夫やすおが、ぷつぷつといった。

気きがつくと、日がかたむきかけていた。

昼食ちゆうしょくもわすれて遊あそんでいたのだ。母ははにことわつてこなかったことが、きゆうに気になりだした。

（どうしよう。お昼ひるに帰かえらなかったから、きつと心配しんぱいしてる。）

そうおもうと、いてもたってもいられなくなった。

「ぼく、帰かえらなきゃ。」

「そうだな。」

安夫も心配になったのだろう。ボートを小屋こやにかえすと、ぼくらは駅えきにむかつた。

駅にいても、すぐでる汽車きしやはなかった。